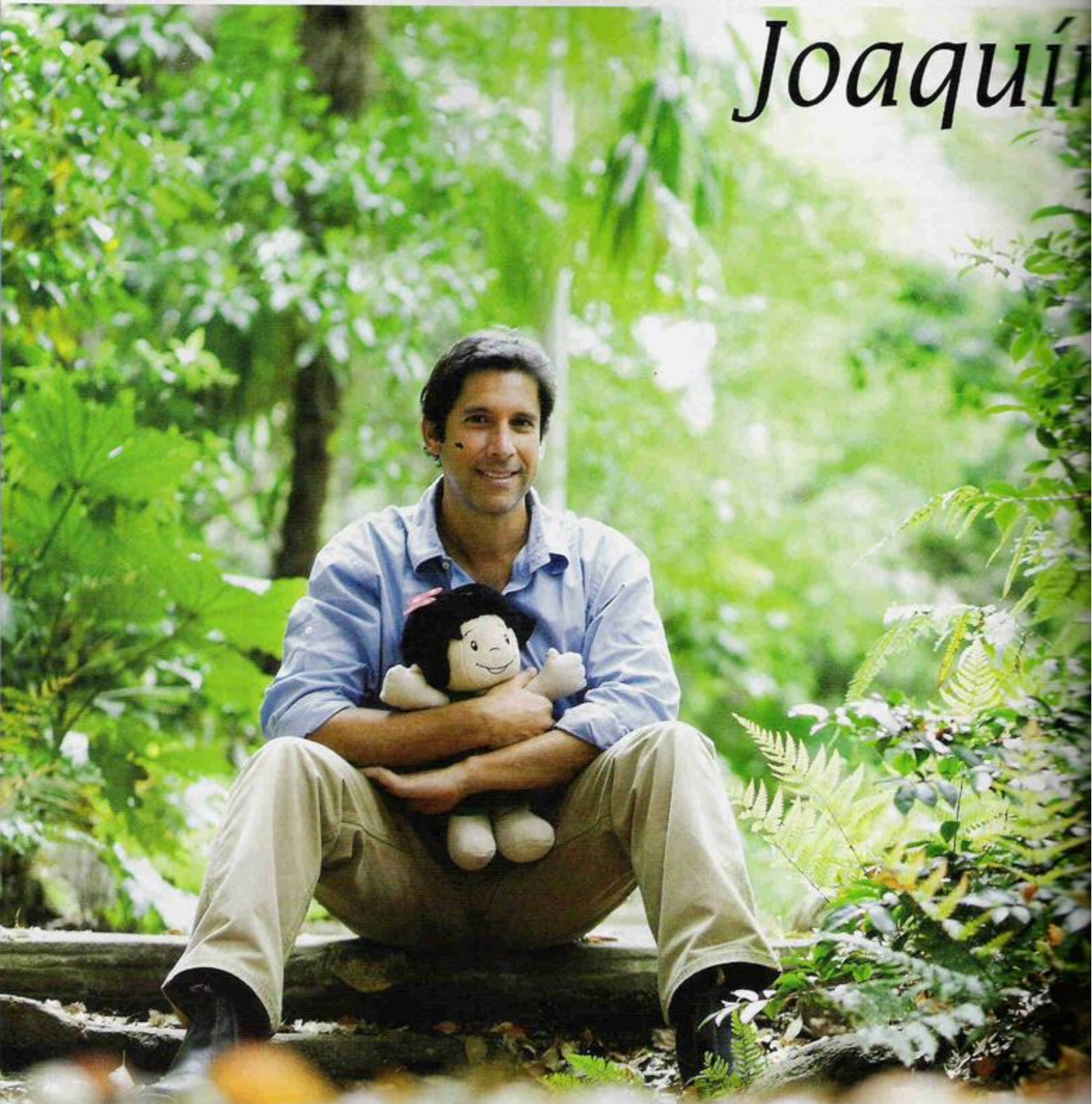


今回、プロジェクトを知ってもらうため、東京や富士山を訪れたホアキンさん。「日本はとってもいい国。世界を良くしようという意識を感じられるし、希望をくれる」という。

Joaquín



Felipe Leguía Orezzaoli

子どもたちに“土地”を与える、
ペルーのNPO法人ANIA創設者

ホアキン・フェリペ・レギア・
オレッゾリ

子どもたちに小さな土地を与え、地球のため、
そして自分のため、自由に使ってもらおうプロジェクト
「チルドレンズ・ランド」。

南米ペルーのNPO法人ANIAが行うこのプロジェクトは、
子どもたちに自然への愛情を育むためのものだ。
創設者のホアキン・フェリペ・レギア・オレッゾリさんに話を聞いた。

photographs by Masaya Tanaka text by Miya Kikuchi

子どもに“土地”を与える

ソトコト(以下S) 子どもに土地を与える「チルドレンズ・ランド」とは、どのようなプロジェクトなのでしょう?

ホアキン・レギア(以下J) 子どもにも0.5〜1平方メートル程度の土地を与え、自然と調和する形で自由に使ってもらおうというもの。自由といっても、土地の3分の1は自分の好きなこと、例えばビザが好きならビザの薬草のために使う。そして残り3分の1は、チョウが来る花を育てるなど、自然のためにすることを。この3点を踏まえ、子どもたち自身で土地を管理し、

使ってもらうのです。

アマゾン川があるペルーのマドレ・デ・ディオス地域では、チルドレンズ・ランドに使われている土地を観光客にも開放し、子どもたちにガイドしてもらおうプロジェクトも展開しています。自らが手がけた土地や植物のことなどを一生懸命に説明する子どもたちの姿はとても楽しそうです。

S 子どもに自主性に任せることに、大人たちからの反対はなかったのでしょうか?

J チルドレンズ・ランドを始めて間もないころは、たくさんありましたが、親や教師たちは「ここには花を植える」「ここではパーベキユー」と、子どもに自由に使わせようとはしません。子どもは重要

自主性

な存在で、彼らの自主性を尊重し、大人に傍観してもらおうようにするには苦労をしました。今は雑誌やテレビにも取り上げられ、評判も上がったので、ずいぶん楽になりました。うちの地域にも来てほしいという声がかかるほどです。

賛同者から土地を、公式かつ無料で提供してもらおうのですが、その際に彼らからは2つの異なるエネルギーが出てきます。ひとつは「ぜひ、自由にこの土地を使ってください」というポジティブなもの。もうひとつは「あげるけど、あれはやるな。これはダメだ」というネガティブなものです。大人は自分が全てを知っているわけではないというのを忘れて、いつも全てをコントロールしようとして、自分たちが決めたことを行った結果、地球を現在のよう

にめちゃくちゃにしてしまったというのに、です。

植物を育てること、学べること

S 大人が子どもに何かを教えるというのではなく、子ども自身に考えてもらおうという点がユニークだと思いました。なぜ、このようなプロジェクトを思い付いたのでしょうか?

J 自分の体験に基づいています。私の母は、子どもが外に出るのは危ないと言って、幼い私を家から出したけれど、友達といえは自然の中で遊ぶのが好きでした。4歳

J アメリカのデータによると、8歳〜18歳の子がコンピュータゲームに費やす時間は、週に数十時間にもなるそうです。地球の将来を担う子どもが、リアルな世界からバーチャルな世界に移住し始めているといえるでしょう。子どもは世界を形作るパズルのピースです。彼らなしの世界は不完全なものではないかと。

我々の役割は、子どもに自然を守る主役になってもらうことで、「インスピレーション」「健全で安全な場所」「環境にやさしいものを買うなどの行動」「自分が世の中で認められた存在だ」という認識を身に付けさせ、自然と一体化した世界を完成させることなのです。

な庭を見つけたのを機に、そこが僕の憩いの場所となりました。木に登れば空に触れられそうだったし、そこではどんなことでもできそうな気分になれました。「宿題をしろ!」と追いかけてくる大人から隠れる場所でもあったんですが、(笑) 何をしろ、こうでなくてはいい、と命令する者はおらず、私が私のペースでいることを許される唯一の場所だったんです。そんな

体感

S 「自然への愛」について、具体的に教えてください。

J ご存じのように、地球は温暖化などの危機に直面しています。国連の発表では、自然界が生き物の生存のために提供している気候や水などのサービスの60%が、すでに悪化し始めているそうです。人々は危機を救うのは技術やお金だと思われていますが、本当に大切なのは技術やお金自体ではなく、



ANIAのマスコット、「アニア」は自然と愛の象徴。また、同団体では、自然の大切さを楽しく学べるよう絵本も作成。

Joaquin Felipe Leguia Orezzoli
62年生まれ。ペルー大統領の祖父と労働大臣の父、保守的な母のもとで育つ。幼少からアマゾンの大自然に慣れ親しみ、コーネル大学にて自然科学、イェール大学にて環境マネジメント、卒業利組織のマネジメントを学ぶ。95年、ペルーのリマにて「ANIA」(Association for children and their environment)を設立。2003年にアソシエイト・フェローに選出される。世界の子どもたちに自然に触れる機会を提供したい毎日を送る。また、日本では今後、五井平和財団 (<http://www.gppeace.org/>) がANIAと提携し、プロジェクトを広めていく。
ホームページ<http://www.mundodeania.org/eng/index.html>





人口の約40%が子どもというペルーでは、子どもの参加が持続可能な社会づくりに欠かせない。ANIAでは子どもがより楽しんで活動に参加できるよう、ユニークなプロジェクトを年に1回選出し、表彰。ネット・コミュニティ上で、自分の土地の写真や情報を公開し合い、チャットを通じた交流や、アイデアの交換が行えるようにするなど様々な試みを行っている。写真はすべて ANIA 提供。

「そして、その時に一人一人が自然の一部である水を飲み、動植物を食べて生きていくという事は、人間も自然の一部といっても過言ではないこと。つまり、自然界に起こることは自分にも起こるということ」「植物などを育てれば「我慢」細部への配慮」「観察の仕方」

「自然を育むためにミツバチやチョウなどが貢献していること」を自然の中で体感することで、自然に良いことをすれば自分に良いことが返ってくることに気づかせ、自然に対する愛を感じてもらおうことができます。

社会貢献はできる

S ペルーには海岸部、アマゾンなどの熱帯雨林、アンデスなどの高地がありますが、どこでもチルドレンズ・ランドは行えるのですか？
J もちろんです。現地の状況に沿って実施してもらっています。

都市部のアパートに住んでいて庭がなければ、植木鉢3つを子どもにあげて、ベランダで育てるということでもいいんです。参加者の中には車いすを使う子がいて、その子が植物を育てやすいように特別なテラブルを作って、その上で植物を育ててもらっているケース

もあります。私たち自身、知的障害を持つ子どものための特別プログラムも設けています。地域や学校、個人の家まで、誰もがあらゆる場所で、行うことができます。

もともと2001年にチルドレンズ・ランドを始めた時は「チルドレンズ・フォレスト（森）」という名前でした。後にプロジェクトに興味を持った人々から、「うちには湖だけで森がない」「山しかない」という意見が出たため、今の名前に変えました。

S いろいろな方の影響を受け、プロジェクトが柔軟に変化しているようですね。

J 実に多くの人にインスパイアされてきました。特に子どもたちにはいつも驚かされっぱなしです。切り株の周りに花を植えた鉢をたくさん置いて、「ハギング・センター」を作った子もいました。悲しんでいる人に切り株に座ってもらい、みんなでハグ（抱きしめる）するための場所だそうです。プロジェクトを始めて1年後に、土地の誕生日だとラブレターを書く子もいて、チルドレンズ・ランドが感情面にも良い作用を与えることが分かりました。

また、プロジェクトのマスコミトキヤクターであるアニアの人物を僕は常に持ち歩いているのですが、これは国連平和大使で、動物行動学者のジェーン・グドール

「インパクトがあったため、まねしたのです。僕が人形を持っていると人々が注目するので（笑）。おかげさまで現在までに約4000人がプロジェクトに参加し、南米各国からインドまで、世界20か所以上でチルドレンズ・ランドが行われています。」

S ずいぶんと広まっているようですね。これからのように展開していきたいか、夢や予定などはありませんか？

J 現在、ペルー政府と共同で持続可能な発展に関する指標を作成中で、その中に「子どもの環境活動への参加」という項目を盛り込む予定です。なぜかという点、児童労働や児童買春など、ひどい状況に置かれている子どもでも、自然を通じて持続可能な社会づくりに貢献することができるようになります。チルドレンズ・ランドではお年寄りにも参加してもらい、植物の育て方など、彼らの経験を活かしてもらっています。社会で自立たない存在の人々に、世界に貢献していると自信を持ってもらうことで、そのエネルギーを自然への感謝に変えることができます。

いつか宗教や文化の違いにかかわらず、地球上の皆が一つの自然だと認識し、世界中でプロジェクトが展開されるようになってほしいですね。特に少子高齢化の進む日本のような国でチルドレンズ・ランドが実施されれば、素晴らしい効果を発揮すると思いますよ。